

## 【アドミニストレーション】



## ソニーマーケティング学生ボランティアファンドについて

このファンドは、大学生の社会参加への第一歩となり、また、社会をより良くしていこうとするリーダーシップの芽生えとなるようなボランティア活動を支援することを目的とし、ソニーマーケティング株式会社の提案により、日本初の全国の大学生ボランティアを対象とするファンドとして2001年から始まった。当初より本学ボランティアセンターが事務局を担当させていただいている。発足から10年を経過し、当ファンドも軌道に乗り、関係各所からの高い評価を得ている。(ソニーマーケティング学生ボランティアファンドのHP <http://www.sony.jp/CorporateCruise/Volunteer/index.html>)

今回は第13回目の募集となり、前回までのAコース(助成金25万円を上限)およびBコース(助成金10万円を上限。こちらのコースは、新たにボランティア活動を始めようというグループや比較的費用のかからない活動規模の小さなグループにも助成をしようという考えのもと設けられている)に加えてビジネス手法を活用して活動するコースとしてSコース(助成金25万円を上限)を設定し、2013年10月17日～11月18日に募集を行った。審査では、前年同様「学生ならではの企画であるか」「企画が自己満足に終わっていないか、プログラムに社会性はあるか」「活動のユニークさ、チャレンジ性」「企画内容に計画性はあるか」「これまでにないような新規性はあるか」「ファンドが有効に生かされるか」の6つを評価基準とし、応募総数67団体の中から、予備審査、本審査を経て、Sコース4団体、Aコース14団体、Bコース6団体、合計24団体が助成対象として決定された。採用された大学は、国立大学5大学、公立大学2大学、私立大学15大学の合計22大学であった。

分野別の応募状況としては、「地域コミュニティ」が一番多かった。次いで「国際支援」「子ども・青少年」の順であった。今回は阪神淡路大震災、能登半島地震をきっかけに息の長い活動を行っている団体が採用された。東日本大震災被災地での復興支援活動を継続している団体にとっては、行く先の活動の道しるべになることであろう。海外活動に目を向けると地域としては相変わらず東南アジアが多かったが、ソマリアのようにアフリカ諸国への支援活動も複数見られた。また、今年も過去に当ファンドの助成を受けた実績がある団体の応募も目立った。

助成団体に対する初めての試みとして、1月に企画発表会を開催した。これは助成決定直後に一堂に会することで、他団体との交流が参加団体に与える好影響を考えてのことである。参加団体はプレゼンテーション、および昼食をとりながらの懇談で互いを知り、刺激を受け、与えながら有意義な時間とした様子であった。しかし、定期試験期間に掛かる大学もあり、すべての団体に参加していただけなかったこと、参加団体の意思で自由に交流できる時間が少なかったことなど今後の課題も残った。

例年通り、2014年7月には活動報告会が予定されている。報告会ではプレゼンテーション等によりすべての助成団体からの活動報告を予定している。半年後に報告される活動の成果が今から楽しみである。

(波多野)

## 「ボランティアファンド学生チャレンジ賞 2013」について

ボランティアセンターは、2006年度からボランティアファンド（大学HP掲載）の受け入れを行い、2013年度は、2012年度の売上高の10%の853,195円と過年度からの繰り越しを含めた額を合わせた2,963,763円を運用している。このファンドを原資として、2007年度に「ボランティアファンド学生チャレンジ賞（通称ボラチャレ）」を設立し、学内のボランティア団体や新しく活動を始めようとするグループによる企画の実現を支援し、これまで44企画に助成を行った。

2013年度の募集は、「社会課題にチャレンジ！」をテーマとした。ボランティアという概念から枠が広がり、6団体の多様な企画内容の応募があった。特に「1Day for Others」「国際機関実務体験プログラム」、授業の「インターンシップ」の学びを通しての発展型が目立ち、テーマのバリエーションが豊富で企画本来の姿に近づいてうれしく思っている。

台風のため延期となった公開審査会が2013年11月9日（土）に白金キャンパスにて実施され、5名の審査委員（ボランティアセンター推進委員の前嶋昭夫氏、可部州彦氏に加えて、本学からは鶴殿学長、原田ボランティアセンター長、齋藤ボランティアセンター長補佐）による厳正な審査が行われた。続いて審査委員による審査会が開催され、応募全ての6企画を助成企画として選定し、総額417,500円を助成することで決定した。企画の講評はセンターHPに掲載をしているので参考にしていきたい。なお、今年度からはオーディエンス賞を廃止して、1年間成果を取めた団体に「努力賞」を渡すことになった。各チームが競い合って、充実した活動に繋がっていくことを期待しつつ、彼らの成長を見守りたい。

### ■受賞団体（活動期間 2013年10月～2014年9月末）

企画名	団体名
Limelight	みなとメディアミュージアム(MMM)実行委員会(広報課)
KITOを知る！見る！感じる！プロジェクト	ZiVASAN プロジェクト
「変化」を生み出す ～人と人がつながりながら“よりよい社会”を目指す船～	Change Ship
職欲の未来 ～ジョブヨクの未来～	Link up
使用済み天ぷら油のリサイクル	Life-U
スタディーツアー～バングラデシュの今を知る～	海外プログラム事業部

次頁より2012年度受賞団体の活動報告を掲載する。

(中山)

## ボランティアファンド学生チャレンジ賞 2012 助成団体活動報告

あちょみだ企画—HIV、AIDS とはどのような病気か—

団体名：あちょみだ

### 【はじめに】

あちょみだは、タイ北部山岳地帯に住む少数民族の女性や子ども達のサポートを行っている学生団体である。1年に1回、春休みや夏休みを利用し現地の少数民族の村をいくつか訪れ、女性や子ども達を対象にライフスキルを身につけてもらう為の勉強会や、互いの理解を深めるための文化交流を行っている。また、国内では大学生や高校生を対象としてHIV/AIDSに関する勉強会や、タイだけではなく日本も関係している人身売買について学ぶ機会を設けている。その他、学内や学外のイベントにて現地で買い付けを行った民芸品を販売し、山岳民族の文化や暮らしに触れてもらう活動も行っている。

今回頂いた助成金の使途内容は、2013年3月15日から3月21日に行った現地でのプロジェクトが対象である。

### 【企画の内容・背景】

今回私たちが注目したのは、山岳民族を取り巻く健康問題である。現在、タイ山岳民族の間にはHIV/AIDSを始め、多くの性感染症が蔓延している現状が見られる（北部チェンライ県：1984年から2011年までの累積患者数は37万6690人/外務省HPより）。実際に現地へ赴き、子ども達と交流する中で彼女たちが性の悩みを持っており、健康に関する基本的知識が不十分である現状に気付いた。私たちは、貧困が根本的な原因であり、貧困が彼らの教育やライフスキルを身につける機会を奪い、誤った知識を得ることに繋がっていると考えた。

企画の内容としては現地で交流のある子ども達の内、性に積極的になる思春期の少女を対象としてHIV/AIDSや他の性感染症についての基本的知識、予防法を中心にレクチャーを行った。この際、彼らが理解し易いようイラスト・クイズなどを用いた紙芝居を作成し、予防法については実物の避妊具を用いた実演を行い、自ら体験してもらう場を作ることで、子ども達に性を身近に感じてもらうことを重視した。

### 【実績・成果】

現地での企画は、タイ北部チェンライ県にあるドイポーソン村と、パヤオ県にあるYMCAパヤオセンターの2ヶ所で実施した。ドイポーソン村は、少数民族であるアカ族の住む村だ。1回目は、この村に住む12～19歳の女の子計9人が参加した。次に訪れたYMCAパヤオセンターでは約20人の女子中高生を対象に2回目の企画を行った。この施設は1993年に横浜YMCAとバンコクYMCA協働プロジェクトとして設立された生徒寮であり、以前から人身売買や子どもの商業的性的搾取などの被害が深刻なパヤオ県において、子ども達を危険から保護することを目的としている。

彼女たちの通っている学校での性教育には大きな差があり、生理の基礎知識を理解していない子もいれば、性感染症の一つひとつを詳しく教わったという子もいた。教師によって知識が異なっていたり、性の問題に対する意識にむらがあったりすることを彼女たちは不安に思っていたようだった。どちらの場でも、学校の教師をはじめ周囲の大人の知識不足により、間違っただ知識を常識として身につけている子どもが多い現状を目の当たりにした。これは、現代の大人が悪いという訳ではなく、世代を通じてそのようなサイクルができあがってしまっていることが問題だと感じた。

企画を進めるうえで心がけていたことは、決して“一方的な知識の押し付け”で終わらせないことである。限られた時間のなかでの確に彼女たちのニーズに応えるため、一人ひとりの性に対する異なる意識や抱えている悩み、不安などを聞くことを最優先とした。堅苦しく難しい講義のようにせず、紙芝居を用いた〇×クイズや手書きのイラストを解説に使用することで女性の身体に関するデリケートな疑問も皆で共有しながら解決できる場となった。この活動はタイ北部のごく一部地域でのことだが、自身の性について正しい認識を持ち、自信を持って周囲に発信できるリーダーを育成することに繋がる。やがて私たちや、彼女たちが下の世代へ知識を受け継ぐようになったとき、それは大きな力となるに違いない。そう実感できたプロジェクトであった。



あちょみだ自慢のイラスト紙芝居



Y M C A パヤオセンターでの企画の様子

#### 【最後に】

私たちは今回の活動を通して、ともに学んでいくことの大きな意義を再確認した。活動の対象となった少女たちは私たちと同年代であり、互いに心を通わせた交流ができたからである。H I V / A I D S や性についてのレクチャーの際も同じ女性として彼女たちの悩みや疑問・意見を聞くことができ、同時に私たちも彼女たちから新たな気づきを得る事が出来た。それは、正しい知識を得る機会が不十分なタイの少女たちだけではなく十分な教育を受けているはずの日本の若者もまた、意識が低いためにその知識を生かすことができていないという現状である。それらを改善する為に、日本でも大学生や高校生を対象に同世代である私たちからH I V / A I D S や他の性感染症の知識や危険性を教える場を開きたい。このような活動で少しでも意識が行動に繋がるきっかけとなることがあちょみだの目標である。

これからも、私たちはともに学び、ともに成長していきます。

(国際学部4年 角田真波 大谷なつみ 隈部優佳 室伏藍)

## MGVAパンフレット

団体名：MGVA

### 【目的】

明治学院大学には、多くのボランティアサークルが存在している（約20サークル）。しかし、それぞれの繋がりはとても薄い状態である。さらに、学内のボランティア活動をすべて取りまとめていると思われがちなボランティアセンターだが、ボランティアセンターとボランティアサークルの繋がりほぼ皆無であった。

このことにより、大学でボランティアをしたいと思っても、自ら情報収集をしていくのは難しい。

上記二つの問題点から、わたしたちMGVAは明治学院大学内のボランティアサークルのメンバーを対象に、サークルの紹介とメンバーのインタビューを載せたパンフレットを作成することとなった。

### 【内容】

明治学院大学内で活動しているボランティアサークルのうち、学内でも有名なサークルをピックアップし、さらにポートヘボンでもパンフレット掲載協力を呼びかけた。その結果、12団体（アジアの“わ”、あちょみだ、エコキャンパスミーティング、OPENROOM、JUNKO Association、STUDY FOR TWO 明治学院大学支部、人形劇団ZOO、ハビタットMGU、Free♡Will、ぼけっと、手話サークルぼっけ、TABLE FOR TWO～mgmg～）が集まった。

内容としては、それぞれのサークルの代表者に、活動の中での自身の体験談や活動内容を織り交ぜながらインタビューを行い、その内容と活動写真を掲載した。その中でボランティアセンターの紹介もしているが、インタビューは行わなかった。

### 【経過】

2012年	11月	助成
	12月	各サークルへインタビュー
2013年	1月	↓
	2月	編集作業
	3月下旬	印刷
	4月	配布
	5月	イベント開催
	7月	アンケート集計

助成金授与後、12月から各サークルへインタビューを開始。MGVA側は2人でインタビューを行い、時間はだいたい1～2時間程度行った。

インタビュー終了後、編集作業へと入った。主にPCソフトの「Indesign」を使用。装飾素材として

デザイン本を使用。読者が手に取りやすく、読みやすいデザインを重視して作成した。

すべて完成し、印刷した後、4月に入学してきた新入生へ向けて配布。新入生オリエンテーションや、ボランティアサークル合同説明会などで配り、ボランティアセンターに設置した。

このパンフレット作成の延長線上として、5月9日にイベントを開催。内容は、パンフレットで取材協力してくれたサークルメンバーと、新入生の座談会。直接、活動の体験談を新入生が聞くことで、さまざまなボランティアサークルへの興味と関心を持ってもらうこと、サークルへの加入の勧誘が目的。サークル側と新入生合わせて50人もの参加者が集った。

その後パンフレット読者に対してアンケートを実施し、集計した。その結果は中間報告会で報告済みである。

#### 【活動を通して得た学び】

まず、各サークルへのインタビューを通して、他サークルの活動を知ることができたことが大きい。ボランティア活動というものは幅広く、さまざまなアプローチの方法があるということ、サークルのメンバー一人ひとりにそのサークルで得た知識や経験、エピソードがあるということを知ることができた。それと同時に、その知識や経験をその人やそのサークル内に留めてしまうのはもったいないと感じた。だからこそ、パンフレットやイベントのような、たくさんの人に共有できる手段を作っていくことが必要なのではないだろうか。

パンフレット作成に関しては、読者が読みやすいレイアウト、見やすい配色、手に取りやすいデザインにすることの重要性、難しさを学ぶことができた。写真に関しても、画質の優劣がはげしく、アンケートの中でも指摘があった。内容だけでなく、デザインの部分にも多く配慮が必要であったと実感した。

#### 【今後の課題】

今後の課題は、サークルとの繋がりを継続していくことである。そのためにどのようなイベントを企画していくのかということを考える必要がある。また、2014年度春に向けてパンフレットを作成する場合、今回の反省点を活かすことも課題である。

そして、MGVA自体の認知度を上げることも必要である。冊子の配布、イベントの開催をする中でMGVAという存在を知っているか知らないかの違いはとて大きく感じた。多くの学生にMGVAを知ってもらう活動も必要だと言える。

(学生メンバー 法学部消費情報環境法学科2年 上口茜)

## 「吉里吉里から～今、伝えたいこと～」

団体名：吉里吉里国復興支援部隊

### 【はじめに】

岩手県上閉伊郡大槌町吉里吉里地区は2011年3月11日の東日本大震災で大きな被害を受けた。その東日本大震災から3年以上が経ったが、今なお十分な復興がなされたとは言えない状況である。そんな吉里吉里地区の現在の状況を発信するため私たちは「吉里吉里から～今、伝えたいこと」という冊子を制作した。吉里吉里の現状を発信することによって、多くの人に被災地吉里吉里を知ってもらいファンを増やしたい、また吉里吉里の方々にも自分たちの地域や文化を誇りに思ってもらいたい、そのような思いで冊子制作を進めてきた。ファンを増やす事や誇りを持ってもらうことで復興の後押しをしたいと考えている。

### 【企画のねらいと内容】

「吉里吉里から今、伝えたいこと Vol. 2」では、過去の津波経験からの教訓や祭りを特集として取り上げた。祭りを特集に組んだ理由としては、吉里吉里の人々にとって祭りとは文化継承の意味だけでなく、地域の絆の形成という重要な意味があるからである。震災後は、祭りは人々を勇気付けるという意味も加わり、復興の原動力になり得ると考えた。この祭りの記事には、学生が8月に開催された祭りに練習から参加し、肌で感じた熱い思いを書いている。この記事を通して、吉里吉里人の復興にかける思いを文字に記し、多くの人に知ってもらいたい。

次に過去の津波経験による教訓では「百日復興」と「命てんでんこ」という二つの教訓を掲載した。この二つの教訓は昭和8年の津波の経験を、地域の人が伝えているものである。この教訓を掲載した理由は、今回の震災において過去の教訓が生かされなかったという吉里吉里人のお話を聞き、吉里吉里内外へ教訓を広めることによって次の津波において生かしてもらいたいと思ったからである。災害の多い日本において、過去の教訓を生かすことによって救われる命が一つでも増えるように、そして復興が進み被災地と呼ばれる地域に住む人々が元の生活を早く取り戻せるように、そんな思いでこの二つの教訓を掲載すると決めた。



祭の神輿が神社の階段を駆け上る



郷土芸能の一つ吉里吉里虎舞講中

### 【企画の経過】

「吉里吉里から今、伝えたいこと Vol. 2」は11月の上旬に発行した。特集である祭りが8月に行われたものであるため、熱が冷めない早い時期に発行したいと考えた。何度も校正を重ね発行に至った。シンポジウムやオープンキャンパスなど多くの人が目にする場である配布したいと思う。

### 【活動を通して得た学び】

冊子制作にあたって、吉里吉里の方にインタビューをする機会が多くあった。その際に「こんな話なかなかしない」という言葉を多く頂いた。私たちに話すことによって心のケアに繋がったように感じる。私たちがお話しを聞くだけでも心の負担が軽減するならば、今後もお話を聞く機会を多くもうけていきたい。また、私たち学生もどのような姿勢で復興支援ボランティアに臨むべきか、学ばせていただいた。そして、話して下さる話の内容からも今後震災を経験した社会においてどのように生きていくべきか、さまざまなヒントをもらえたように思う。普段の生活に感謝しながら生きていきたい、親や今の生活にありがたさを感じながら生きていきたい、などの声が学生から聞かれた。

また、吉里吉里と外部の地域をつなぐ媒体としての機能を持つ冊子を制作するという点で、どのように表現するのが良いか、どのようにすればよりよく伝わるか、など普段の学校生活ではできない経験ができた。吉里吉里へ向けた言葉がうまく外部へと伝わるか、逆に外部に向けた言葉は吉里吉里の方に失礼な表現ではないか、など皆で何度も話し合いを重ね制作を進めた。

### 【今後の課題】

今回発行する冊子はボランティアセンター他、シンポジウムやオープンキャンパスで配布予定だが、より多くの方に手にとってもらうためにはどのようにすればよいかということが今後の課題である。吉里吉里地区においても、明治学院との交流が深い方などには配布が容易であるが、あまり交流のない方などには配布が困難であるため、どのように配布するか考えていきたい。また、記事も交流の深い方が中心となってインタビューをおこなっていったため、限定されたインタビューとなってしまった。交流がなくとも吉里吉里で暮らす方は多くいるため、そういった方々にもスポットを当て全国に発信していきたい。



天照御祖神社例大祭の練り歩きの様子



天照御祖神社例大祭の旗

(学生メンバー 社会学部社会学科2年 泉恭華)

子どもたちに電気を届けよう！～ LIGHTS for SMILE ～

団体名：JUNKO Association

#### 【企画立案までの経緯と目的】

私たち JUNKO Association は「世界の恵まれない子どもたちのために」「学生による創造と実践の場」の二つの理念のもと、ベトナム・ミャンマーを活動拠点に教育支援活動を行っている。ミャンマーでの活動は 2001 年から始まり、子どもたちのために活動をしてきた。2011 年、軍事政権から民政移管した後、ミャンマーは外国から大変注目を集めており、都心部のヤンゴンでは徐々に生活水準も向上しているが、それ以外の地域は農村地域が主であり、低所得の家庭が大部分であるのが現状である。

今回の企画の対象である、ハンターイエ僧院孤児院の位置する地域もそのうちの一つである。ハンターイエ僧院孤児院はレパダタウンシップという、都市部から離れた田舎町にある。僧院孤児院というのは村人などを含め、僧院を訪れた人々から寄付やお布施をもらうことで経営を賄っている。しかしそれは決して安定したものではなく、僧院は慢性的な経営難に陥っている。この孤児院には、僧侶、先生、そして親がいない子どもや、家庭が経済的に苦しいため親と離れて暮らさなければならない子どもたち約 50 人が暮らしている。この僧院での電気寄付の企画を考えるきっかけとなったのが、私が初めてこの僧院内を見学したときのことである。子どもたちの部屋に入ったとき、目に入ってきたのは一つの小さくて古びた電球だった。それはとても部屋全体を灯せるようなものではなかった。実際に、夜間の学習時にはロウソクを灯してそこに 3～4 人で囲んで勉強しているということがわかり、とても衝撃的であった。子どもたちがこのようなとてもいいとは言えない、むしろ勉強に集中するのが難しいような環境で毎日勉強しているのを想像したとき、「この状況を何とかしたい！」という強い気持ちが生まれた。

当時、ハンターイエ僧院孤児院にはすでにソーラーパネルが一枚設置されていたが、明らかに電気は不足している状態だった。僧侶の方や先生、子どもにインタビューしたところ、理想の電力は現在の 2 倍近くであった。このニーズに答えるため、ソーラーパネルを含む電気機材の寄付を現地に提案したところ、現地からもかなり強く、熱心に電気機材の要望が私たちに伝えられた。寄付することによって、彼らの理想の電気を賄うことができるとともに、子どもたちの夜間の学習時間はロウソクを囲むのではなく、明るい電気の下で子どもたちが今までよりもっと勉強に集中し、より一層学習意欲を高められる環境をつくることができると考えた。実際に自分の目で見て、感じて、また現地の方々の話を聞いて、電気を賄うことはここに暮らす子どもたち、僧侶、先生が得られる効果は大きいものだと考え、この寄付をすることに至った。

#### 【2回の現地訪問】

2013 年 2 月、企画が始まってから初めての現地訪問を行った。ミャンマーに到着し、ハンターイエ僧院孤児院に訪問するまでに、まずは現地の電気店に行き、現地の協力者とともに寄付物を再度確認し購

入した。いざ、寄付をするために、ハンターイエ僧院孤児院へ。時間が限られていたため、実際に設置をするところは立ち会うことはできなかったが、寄付を行うことができた（写真）。

2013年9月、2回目の現地訪問。2月の訪問から実際にどのように使用されているのか、本当に変化があったのか、どのような変化があったのか、確認ができていなかったのが懸念であった。そのため2回目の訪問は事後調査を主な目的として訪問した。実際に、僧侶、先生、子どもたちにインタビューしたところ、「生活面、勉強面でできることが増えた」「いつでも（夜や暗いときでも）勉強できるようになった」「先生の話をよく聞くようになった」「生活が楽しくなった」などという言葉が言ってもらえることができ、電気寄付前に比べるとプラスの効果があったことが伝えられた。また、実際に使用しているところも見ることができ、寄付したものが実際に役に立ち、彼らの生活に少しでも貢献できたと実感し、何より彼らから感謝の言葉をいただいた時のことは、とても印象的でうれしく感じた。この企画の目的であった、必要な電氣量を賄うことができ、「子どもたちの学習環境の改善」は十分に達成できたと考えられる。



電気の下で勉強する子どもたち



実際の寄付の様子

#### 【企画を通して】

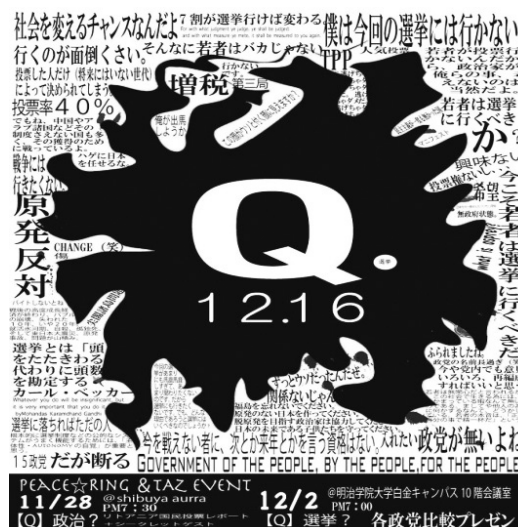
ハンターイエ僧院孤児院での活動は今回がゴールでも最後でもない。彼らは、まだまだ課題を多く抱えており、それらに関するさまざまなニーズを感じた。それに対して自分たちは何ができるのか、何をすべきなのか、を深く考え、実行していく必要がある。ボランティアをする、実行するまでの過程において、押し付けで一方通行なものではなく、どれだけ相手の立場に立って考えられるか、が重要であると感じた。これからもハンターイエ僧院孤児院と関わっていくにあたって、現地とともに考え、現在、そして将来の子どもたちのために活動していきたい。

(国際学部国際学科3年 丸山みなみ)

創（キズ）～3.11から何を学ぶのか。～

団体名：T A Z

T . A . Z (the Temporary Autonomous Zone) は現状に対して問題意識を持っている若者たちがそれぞれのテーマの共有と共闘のため集い、活動を展開してきた。その問題意識の一つとして3.11後の社会づくりがある。2011年3月11日に発生した東日本大震災の被害により、多くの方々が亡くなった。また、今でも原発被害のため仮設住宅での生活を余儀なくされている方も大勢いる。あの日からこの企画を考えた当時の私たちは、「一年半が過ぎ、少しずつあの被害が遠くの世界のように感じているのは否めない。次世代の担い手である私たち学生が、学生同士、そして現場で活躍されている方々との対話を通し、私たちはどのような世界に住みたいかを話し合い考える場所が必要である。答えが出るものではないが、私たちは可能性を探るのをやめてはいけない。今こそ私たちが生きる社会を見つめ直し、悩み尽くすことこそが、将来の私たちへの大きな財産となるのではないか。そしてそれこそが、私たちの防災意識を高め、近年度重なる自然災害に柔軟な対応をしていくことにつながる」と考え、この企画に至った。



企画の内容としては、「震災後・原発事故後の社会をどう生きていくのか」を考えていくイベントをほぼ毎月開催した。単なる学生だけの喋り場では無く、ゲストを呼び専門性の高いイベントにするよう心がけ、また参加者が受け身にならないように、毎回イベント内でディスカッションの場を設けた。当初は震災・原発事故に焦点を当てていたが、イベントを行っていく中で、この問題の根源には、私たちの社会問題に対する無関心という要因が潜んでいると考えた。その矢先に衆議院が解散したこともあり、一層当事者の問題である選挙・投票に焦点を絞り、若者の社会参加を促すことに専念した。また、途中イベントでゲストが話す内容が難しかったとの声もあり、さらに、たくさんの人が参加できるように、企画の手段をイベント主催形式だけでなく、“VOTE Tシャツキャンペーン”という、若者のファッ

ョンに社会参画意識をゆるやかに取り込む、といった企画も立ち上げ、より多くの人に参加していただいた。



当初の予定では震災・原発事故の風化について考える事をメインピックとしていたが、活動を行っていく中で当事者の問題として若者の社会参加（特に投票について）にフォーカスを当てるようになっていった。これは全く予定していなかったことではあるが、2回の選挙を終えて（ほとんどの人が初めての投票であった）現代社会の問題を当事者として考えられた事はよかったのではないかと考えている。しかし、選挙という政治に関わるテーマを取り上げることで、いわゆる選挙活動と誤解されることも多々あり、選挙に対して関心を高めてもらおうという活動の実際を周囲に発信するときは注意を要した。また、選挙について活動するようになってからイベントが震災について全く触れなくなったかと言われればそうではなく、どのイベントも「震災後の社会でどのように生きていくのか」という事がテーマであり、その意味では震災を風化させないという当初の目的に沿って活動していたと思う。また、最後の活動が参院選の前日の東京新聞の夕刊の一面に掲載されたこともあり、多少なりとも社会的に影響を与える活動となったと考える。今後については次回の選挙に向けて、引き続き政治への関心を高める活動や、震災の教訓を生かした防災意識の啓発活動などを地道に取り組んでいくつもりである。

(国際学部国際学科2年 中村充孝)

## TFT×難民支援キャンペーン

団体名：TABLE FOR TWO明学(m g m g)

タイトルにあるようなTABLE FOR TWO (TFT) と難民支援のコラボはならず、企画に変更を加える形で難民支援を行う結果となった。元々の内容は、日本における難民の母国料理を学食で販売するというもので、日本に難民が存在する事実、また日本にいる難民の母国はどこのだんな国なのか、学食を通じた啓発活動を行うことが目的だった。自分自身が当時TFT明学の代表をしていたことから、TFTの食支援のメソッドを生かして、TFTの食支援の他に何かできないだろうかと考えたことがきっかけとなった。さらに今回の企画を通し、TFT明学のメンバーがヘルシーメニューの考案に励み、オリジナリティーあるヘルシーメニューを展開することも目的の一つだった。TFTの元々のコンセプトとして、ヘルシーな食事を通して自分たち(支援者)が健康になると同時に、アフリカの子供達に、食事に含まれた20円の寄付金を使って食支援を行うことがある。しかし大方の学生が低カロリーでバランスの摂れた食事よりも満腹感を求める現状に、ヘルシーメニューを展開することは容易なことではなかった(下図のようなメニュー内容が続いた)。そこで今回の企画を通し、TFTのメンバーが栄養の摂れたヘルシーメニューの考案に向き合い、展開することができればと、思ったこともきっかけの一つである。

ところが結果的にTFTの20円寄付のメソッドを利用して、TFTとその他の団体へ寄付をするというシステムはどれも上手くいかなかった。改めて社会貢献活動の難しさを知ったような気がした。もともと、TFT明学メンバーの一人が1 Day for Othersで難民支援協会のプログラムに参加していたこと、またボランティアファンド学生チャレンジ賞の顧問であった可部先生が難民支援協会と縁があったことから、この企画を進める上で難民支援協会と関わることができた。最終的に難民支援協会の協力があったからこそ、今回のメニュー展開が達成できたが、企画が進むにつれ活動を行うTFTメンバー自身と、TFT×難民支援のコラボ展開を受け入れる企業に矛盾を生むようになってしまったことも事実である。そもそも、アフリカ食支援の団体がなぜ難民支援を行うのか、生協での展開になじみのあるTFTがなぜ食堂ではなく8号館カフェ(東京ケータリング)で展開しているのか。TFT×難民支援という曖昧なタイトルが付けられた企画書だったからこそ、このような疑問が原因によるトラブルを生むことになってしまった。よって、当時の最終目的であった20円の寄付金は、ヘルシーな難民の母国料理を通して各10円が難民支援とTFTの寄付金になるランチメニューの展開は中止となり、形を変えた企画が



行われることになった。

新しい企画とは、日本にいる難民の母国料理のレシピ本である「海を渡った故郷の味」(難民支援協会出版)のメニューを元に、在日難民の数が多いとされる三つの国と地域(ビルマ・カチン・ネパール)の母国料理を販売するもので、寄付金のつかないランチメニューが週1回50食限定で8号館ラウンジにて展開されるというものである。寄付金を付けることはできなくとも、普段とは少し違ったエスニックな匂い・味を通して、難民の母国料理を楽しみ、さらに日本における難民の現状について考えるきっかけを作ることを目的として新しい企画が練り直された。料理の販売時には、日本における難民の現状を説明したパネルと、展開される料理の国の難民の現状を説明したパネルを同時に展示することも考えられた。

**DAY1: 6/20 (Thu)**  
**Spiced Chicken and Potato Stew**  
 -鶏肉とジャガイモのスパイス煮込み  
 ★ **Burma (Myanmar)**  
 ビルマ語ではチキナーールヒン、アールヒンはジャガイモ、ヒンは料理という意味。  
 In Burma, this stew is called Kyetha Aloo Hin. Kyetha (chicken), also (Potato) hin (dish).

**DAY2: 6/27 (Thu)**  
**Spicy Beef Stir-fry**  
 -牛挽き肉のスパイシー炒め  
 ★ **Kachin (Myanmar)**  
 ミャンマーの少数民族は独自の言葉を持つ。ビルマ語ではアムダーカチンチエ、カチン語ではシャンカと呼ばれるこの料理。  
 Ethnic minorities in Myanmar have their own languages. This dish is called "Amethae Kachin Chae" in Burma but "Shan Hkaik" in Kachin.

**DAY3: 7/4 (Thu)**  
**Pork Stir-fry with Garam Masala**  
 -豚肉のガラムマサラ炒め  
 ★ **Nepal**  
 ネパールの家庭料理には欠かせないマサラ・ニンニク・トマトを使用。  
 The main seasoning used in this dish is masala, garlic, and tomato. These three ingredients are vital in Nepali cuisine.

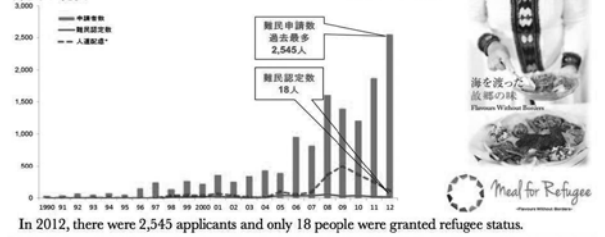
¥390 drink set ¥450  
 Lunch time @ International Lounge

**企画概要:**

家庭料理の味や匂いは、難民にとって迫害の辛い記憶と家族との幸せな時間を思い出させます。私たち学生が日本にいる難民の母国料理をランチとして食べてみる。一つのランチメニューがその国・地域・そして日本で暮らす難民の姿に思いを寄せるきっかけになれば幸いです。

These refugees in Japan have immigrated from their countries and come to Japan. However they have brought their culture with them, such as their traditional dishes that are full of memories from their home countries. So first, please have a lunch introduced by refugees in Japan. We'd like you to have a chance to think about the refugees living in Japan and their home countries by tasting the food introduced here.

**難民の現状:**



今回のような混乱が起きてしまい当初予定していた企画が変更されることはとても残念だったが、同時に昨年TFT明学の代表を務めていた自分の安易な発想が原因であったことに反省している。ところが、無事ラウンジで難民の母国料理が展開できたこと、販売当日は学生の人気メニューとなり、これらをもっと日本における難民の現状に興味をもってくれた学生が何名かいたこと、さらにはこの活動を継続させて欲しいと願う学生や教授の声まで聞こえたことから、今回の活動は難民を知るよいきっかけづくりとなったことに改めて感謝したい。社会貢献は簡単には達成できない事も理解した。きっかけが重要な点であることや、勇気を持って一歩踏み出してみる点などは今回の経験から学べた大切な結果だと思っている。

(国際学部国際学科3年 田中真穂)

## 「かわいい子には旅をさせよ」ツアー

団体名：「Do for Smile@ 東日本」プロジェクト陸前高田チーム



「かわいい子には旅をさせよ」ツアーは「陸前高田のことを忘れてほしくない」「子ども達の走り回っている姿を見たい」との現地の声を受けて昨年度から実施されている、将来の社会を担う小中学生が被災地を訪れるスタディツアーである。今年度も軸とする目的は変わらず、陸前高田を「忘れない」という点を重視して企画を立案した。ツアーでは、昨年度に引き続き東日本大震災の被害と人々のその後の歩

みについて、さらには陸前高田という土地と文化を伝えることとした。

まず、本企画に関わってくださった重要なアクターは陸前高田で復興に尽力している「なつかしい未来創造株式会社」「株式会社ソシオエンジン・アソシエイツ」、旅行業に特化した「株式会社エイチ・アイ・エス」である。各社には現地でのさまざまな調整やツアーコーディネートにおけるアドバイス、また旅行業の専門家としてツアーを法的側面からサポートしていただくなど、多大なるご尽力を賜った。

ツアー実施に向けて段階的に計画を始めた。催行日まで関係各者と調整を続けつつ、6月からテレビ神奈川、各新聞社、タウン誌などに情報を掲載、戸塚図書館などにチラシを置いていただく一方、(株)エイチ・アイ・エスに場所を提供していただき、6～7月に募集説明会・参加者説明会を催行した。また、湘南とつかYMC Aの薩摩藤太氏にリスクマネジメント講習をしていただき、貴重なアドバイスを頂いた。さまざまな方の協力の結果、定員を上回る参加申し込みがあり、最終的に中学生3名、小学生27名の計30名の参加者が集まり、ツアー催行の運びとなった。当日は明治学院大学の学生メンバー10名に加え、ボランティアセンターコーディネーター、(株)エイチ・アイ・エスの添乗員が引率として参加した。このツアーには日にちごとにテーマを設定、子ども達が順を追って各プログラムへの理解を深められるよう工夫した。

1日目のテーマは、「陸前高田を知る」である。震災や陸前高田についての基礎知識や被災地でのマナーを身につけてもらおうとクイズ・プレゼンテーションを行ったほか、防災教育として「釜石の奇跡」を基にした紙芝居を発表した。また、なつかしい未来創造(株)代表取締役社長の田村満氏、同社スタッフの戸羽友里恵氏から震災当時から現在までの陸前高田を現地の生の声で初めて届けていただいた。

2日目のテーマは「3.11を知る」である。まず、午前中に陸前高田市観光物産協会の實吉義正氏のガイドで被災地陸前高田の3.11当日についてお話していただき、その後高田市街地を実際に見てまわった。震災時の写真や映像・体験談を交え、はじめから何もなかったかのような市街地や現在では数少ない震災当時から残されている建物をみた。続いて、午後からは「今泉集会処あがらっせ」を訪れ花壇作りのボランティア体験をした。途中から雨に見舞われたが、子ども達は花壇にメッセージを書くなどしてそれぞれの陸前高田の人々への想いを真剣に形にし、実践することができた。そして、この日の夜

からホームステイをした。ホームステイ先ではお互いにお話をして、交流を深めたり、家から近くの被災地域を案内していただいたり、津波の映像を見せていただいたりと貴重な経験をさせていただいた。

3日目のテーマは「陸前高田の文化を体感する」である。まず、午前中に長洞元気村という長洞地区自治会組織を訪問した。元気村には震災前のコミュニティが残っており、震災以前からの助け合いの精神についてお話ししていただ



た。子ども達は自ら質問をしながら、地域のつながりの大切さを感じていた。そして、午後からはけんか七夕祭り・うごく七夕祭りにご厚意で参加させていただいた。このお祭は古くからの伝統があり、本来先祖を弔う意味を持つ。その意味と支える人々のつながりの強さを体感する素晴らしい経験となった。

4日目はツアーを通しての「ふりかえり」としてかわいい子新聞を作成した。学生メンバーのアドバイスを受けながら、子ども達は限られた時間の中で真剣に取り組み、一人ひとりの考えを新聞にまとめていた。この日は田村満氏やホームステイ先の方も来て下さり、子ども達の発表をお聞かせすることができた。こうしてツアープログラムは終了したが、帰路、「また来たい」という子ども達の声を多く聞くことができた。

ツアーから2ヶ月後の10月6日、子ども達に加えその保護者も招き同窓会を実施した。同窓会は現地で学んだ防災を地元でも生かすこと、陸前高田・震災への関心を子ども達には継続してもらい、保護者には高めてもらうことを目的に実施した。参加は希望制であったが、ツアー参加者の過半数を上回る17名の子ども達の参加を得た。プログラムとしてツアー報告、公的機関の作成したマニュアルを参考にしたケーススタディなどを行った。子ども達はツアー時に撮影した写真やムービーを見たり、避難経路を楽しみながら考えたりしながら、陸前高田を訪れたときの気持ちや現地の方々のことを思い起こしていた。陸前高田から田村満氏も駆けつけてくださり、子どもが自由研究で陸前高田と震災についてまとめたものをご覧になったり、会話をしたりと子ども達や保護者と交流を深めていらっしやう。同窓会によって子ども達がさらに陸前高田と震災に関心を深める様子を見ることができた。

今後の課題としては、大きく二つ挙げられる。子ども達の心境に一定の変化が見られたと同時に困難な状況にも直面した。「陸前高田がより身近になった。自分も伝えていかなければならない。」などの言葉が「かわいい子新聞」に見られた一方、3泊4日という短期間では子どもの内面に響いた陸前高田・震災への気持ちがいつ、どのようにその後の行動に表れるか分からないということである。このような声が保護者への聞き取りにも見受けられた。また、この企画自体が関係各社をはじめ多くの陸前高田の方々のご協力がなくては成し得ないものである。よって、陸前高田と我々自身がどのように向き合い、どのようによりよい関係を築いていくかが重要である。

(学生メンバー 国際学部国際学科2年 森崎元輝)

## 未来ワタシ委員会

団体名：L i n k u p

2013年6月、女性に対し、安倍内閣が経済再生に向けて展開している「大胆な金融政策」「機動的な財政政策」「成長戦略」のうち、3本目の矢「成長戦略」において、待機児童の解消、職場復帰・再就職の支援、女性役員・管理職の増加といった女性が輝く日本をつくるための政策が打ち出された。このように“女性”の存在が、今後の日本の成長にとって鍵であることは間違いない。

しかし、実際、社会進出をはかるであろう女子大学生の意識はどうだろうか。これまでの中学・高校・大学生活の中で触れ合う女性像と言えば、母親・先生・塾や習い事の講師、アルバイト先の上司…。さまざまな女性のロールモデルと接する機会がない女子大生は、既存の女性像（例えば、女性は結婚出産をしたら仕事を断念せざるを得ない、女性ならではのライフイベントは働くということに対して不利なものである、介護は女性の責任であるなど）にとらわれがちで、さまざまな可能性に出会っていないのが現状である。

こうした背景を裏付けるものが、2012年、Link up 独自で明治学院大学を中心とした女子大生それぞれに『キャリアに関する意識調査』を行った結果である。「どんな女性になりたいですか？」という問いに対しては、自分のなりたい女性像を回答しているのに対し、「あなたはどのように働くのですか？」という問いでは、8割の学生が「お金のため」という現実的な回答をしていた。なりたい女性像がありながらも、そうした女性のロールモデルと接する機会がないことで、働く行為に対して現実的になってしまい、理想は理想、現実には現実という区切りがはっきりとしている事が特徴的である。キラキラと生きる女性をイメージするにはあまりにもギャップがありすぎる女子学生。こうした背景を踏まえ、Link up では、女子学生とオトナ女子のギャップを少しでも埋め『未来の女性のあり方を考える』場の提供をこれまで2回行ってきた。

そして今回、第3弾を行うにあたり、改めて女子学生50人にキャリアに関するアンケートを実施。その結果、9割の学生が「恋愛」に興味・関心を持っている事が明らかとなった。「恋愛」は後に仕事・出産・子育てに大きく影響を及ぼす。特にパートナーとの関係はその中でもキーとなるだろう。今回の未来ワタシ委員会 Vol. 3では、学生が親しみやすい恋愛を含めた切り口から、さまざまなキャリアを経た、社会人女性の生の声を聞く場を提供。『自分らしく生きる／自分を磨くことが大切』を企画のゴールとし、新しい価値観に気づくことができるようなイベントを実施した。

イベントは6月23日（日）品川の貸しオフィスにて13:00～15:00のワークショップと15:30～17:00の交流会の二部構成で実施。ゲストは私立高校教員、官僚、IT企業、教育関係企業、企業の人事担当、NPO法人代表の7名の多彩な職種の皆さまのご協力をいただく次第となった。実施後のアンケートから、社会人との交流機会が持てたことで、学生が自分自身について改めて考える機会になったとい

う声を多数いただいた。また、「男性がいたらできないような話が出て良かった」という声も聞かれ、女性イベントとしての存在意義を感じられた事は、未来ワタシ委員会における大きな成果ではないかと考える。



今回、3回のイベントを通して運営に関する課題としては、(1) 中心メンバーから運営スタッフへの情報共有の不足 (2) イベント広報の2点が大きく挙げられる。これらの他にも個人的な視点、団体としての視点から細かな課題・反省が挙げられた。それぞれの問題点と解決策を中心メンバーレベル・運営スタッフレベル、それぞれにおいて、今後、より良い企画を作る上で、一つひとつクリアにしていきたいと考えている。

成果やさまざまな課題があるが、今回のイベントを通して印象に残っていることは、会場にいる学生の笑顔、真剣な表情である。まず、学生が実際に体験として得るものが何よりのきっかけになるのだということを実感した。小さなイベントではあるかもしれないが、そこで生み出される学生と社会人との相互作用は、今後の社会を作っていくうえで大きなパワーになるのではないだろうか。今後とも、未来ワタシ委員会の継続に力をいれながら、女子学生のみならず、学生と社会人とのギャップを埋めるような企画を視野に、Link upのミッションである“学生が社会を考えるために、さまざまな人と出逢う場作り”を行っていきたいと考える。

(学生メンバー 社会学部社会福祉学科4年 荻野真奈美)